

「出雲大社」153^pの図
151^p、152^p、162^p

2,767^p-1/3

神庫 2032



$\frac{97}{22.5} = 431$ 尺 $\textcircled{1} 479$ 尺 $320 \times 0.225^M = 72^M$
360尺ではない
「出雲」毎間1740^p $320 \times 0.303^M = 96.96^M$

タイロ

引橋長一町

雲の中に分け入る、床の高い、三十二丈も

の高楼。

三十二丈（三二〇尺）とは、

一体、どんな高さな

参考迄に述べると、

もしも仮りに「周尺」一尺二二・五^寸で

測ったとしたら、――出雲大社の御本殿の

高さは、七二^寸であつた計算になる。

しかし、後代の尺度一尺二二・三^寸

で測つたとすれば、――その高さは、約九

七^寸であつたことになる。

ともあれそれは、床が高い社というよりも

高い高い、九本の柱の頂に設けられた神殿、

といった趣であつたのだらう。

では、その高い神殿の外観は、どのような

ものだったのであらうか。

ここに、二つある「金輪造営図」を見てみ

よう。

①千家国造家に伝わる「金輪造営図」

2766-3/2
下の記載
玉子

登壇口 ②758⁷ 構造 159⁷
②767^{-2/3}

②759^{-1/3}

「出雲文社」152⁷ 153⁷の図
②765^{-2/3}

②766^{-2/3}

勝間(かつま)に所載(しよざい)の南面東寄りの御扉口(ごひらぐち)のところ
には、引橋長一町(ひきはしちやう)と記されてゐる。
②一方、金輪造営図(かなわのぞうえいず)の「明匠(めいしやう)に所載」の
南面東寄りの御扉口(ごひらぐち)のところには、
口上り廊下(こうじやうりやうか)キザハシ〇〇と記されてゐる。
③また、金輪造営図(かなわのぞうえいず)の「明匠(めいしやう)に所載」に
は、ほぼ正方形(せいほうけい)の玉垣(たまがき)の一番内側(いちばんうちがわ)の垣(かき)内に
御本殿(ごほんでん)を配した平面図(へいめんず)が描かれており、この
図(ず)から、
「玉垣(たまがき)の南正面(みなむかひ)の門(もん)である口楼門(こうろうもん)の北側(きたがわ)
すぐのところ」に、御本殿(ごほんでん)の御扉口(ごひらぐち)へと続く
口上り廊下(こうじやうりやうか)の登り口(のぼりぐち)があったと
いう概略(がいりやく)の構想(こうそう)が分かる。
このようにしたことを総合(そうごう)すると、
(1)口引橋(ひきはし)は口上り廊下(こうじやうりやうか)「口上り廊下(こうじやうりやうか)キザハシ」とも
称(なづ)される口登壇口(こうだんだんぐち)の登り口(のぼりぐち)は、玉垣南面(たまがきみなめん)の
口楼門(こうろうもん)を入(はい)つてすぐのところにあつたの
だろう。
(2)そして、その登り口(のぼりぐち)のところから、ほぼ垂
直(ちよく)に切り立つ口引橋(ひきはし)は口上り廊下(こうじやうりやうか)「口上り廊下(こうじやうりやうか)キザハシ」を登(のぼ)つていつて、
ハシ(橋)を登(のぼ)つていつて、
九本(くほん)

の柱の頂の御本殿の御扉口へたどり着いた
のであろう、
と推察される。
なお、引橋^{ひまばい}について、次のよう
な二説^{せう}がある。
(1) 引き去るようにつくった梯子。
義経記五に、「内殿の引橋取って天井に上
りて見れば」とある。
(2) 橋板を取り去って桁^{けた}だけが残るようにつ
つた。
引橋^{ひまばい}渡してとある、
盛衰記三七に、「三方に堀をほり東の方に
引橋^{ひまばい}渡して」とある、
（「玄辞苑」へ引橋^{ひまばい}参照）
とはいえ、出雲大社の御本殿へ登る^{のぼる}為^{ため}に設
けられた引橋^{ひまばい}か、どのような構造のもの
であつたのか、その詳細は分からない。
*ともあれ、何かを引く^{ひく}ようにしたもので
あったと考えられる。

(*)

1周 = 6天

$$P_{in} = 6 \text{ R } 701 = 60 \times 6$$
$$= 60 \times 6 = 360 \text{ R}$$

④ $2769 \div 5 = 553.8$

朝日新聞 出雲大社 163 貼付

主「おろろ」 出鉄社162P25~ ④2573-3/3

きんねん

近年、福山敏男博士は、三十二丈という大

おそろく、

い
な
さ

はまへ

とほんてん

おとひらぐち

のほ

つてゆくミとの出来さー一町ばかりの棧橋が

と
い
う。
(
「
出雲大社
」
千家尊統、
学生社、

一六二頁。『朝日新聞』昭和六_十三年五月二六
日付へコンピュータで復元✓参照

すなわち、

い
な
う

社の御本殿の御扉口から、ゆるやかな勾配で

下る一町(三六〇尺)ばかりの長さの引橋

（階段）が設けられていたのだろう✓

と
い
う
の
で
あ
る
。

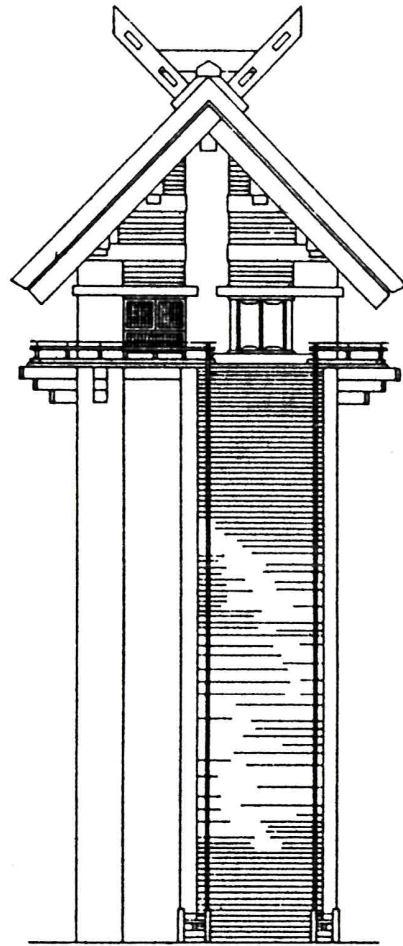
なるほど、御座口のところに、

・ 弓 引橋長一冊

上リ廊下キザハシ〇〇

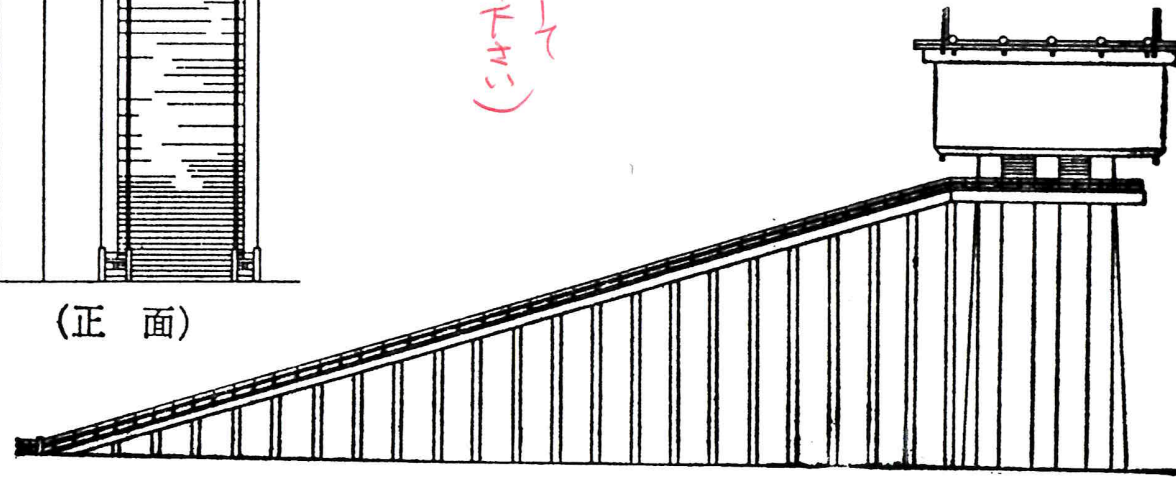
と記されてゐるのだから、
妥当な考えである。

入 ぶ 溝 と



(正 面)

1429 第351図 出雲大社神殿復原図 (側面)
(福山敏男博士の復原図による)



てあったというのは、「金輪造
とで、これはおそらく、稲佐の
あったものと思われる。もしも
これも水上住居の証といってよ
は、十六丈という大社神殿を復
を考えられたが、このように浜
を想像することも、また一案で
空白にするや
(文字があると校正時に大変だから、空白にして
ここに杵築大社が雲に入るば
内海を航行する船を見守って

右上の
*文字を省く。

- ・ 頁の上半分は掲載
下さい。
- ・ 上をはみ出させて
下さい。

- ・ 正面図の高さと、
側面図の高さが、
違っているので、左右に並べら
ないで下さい。
- ・ この図面図の配置に
ついて下さい。

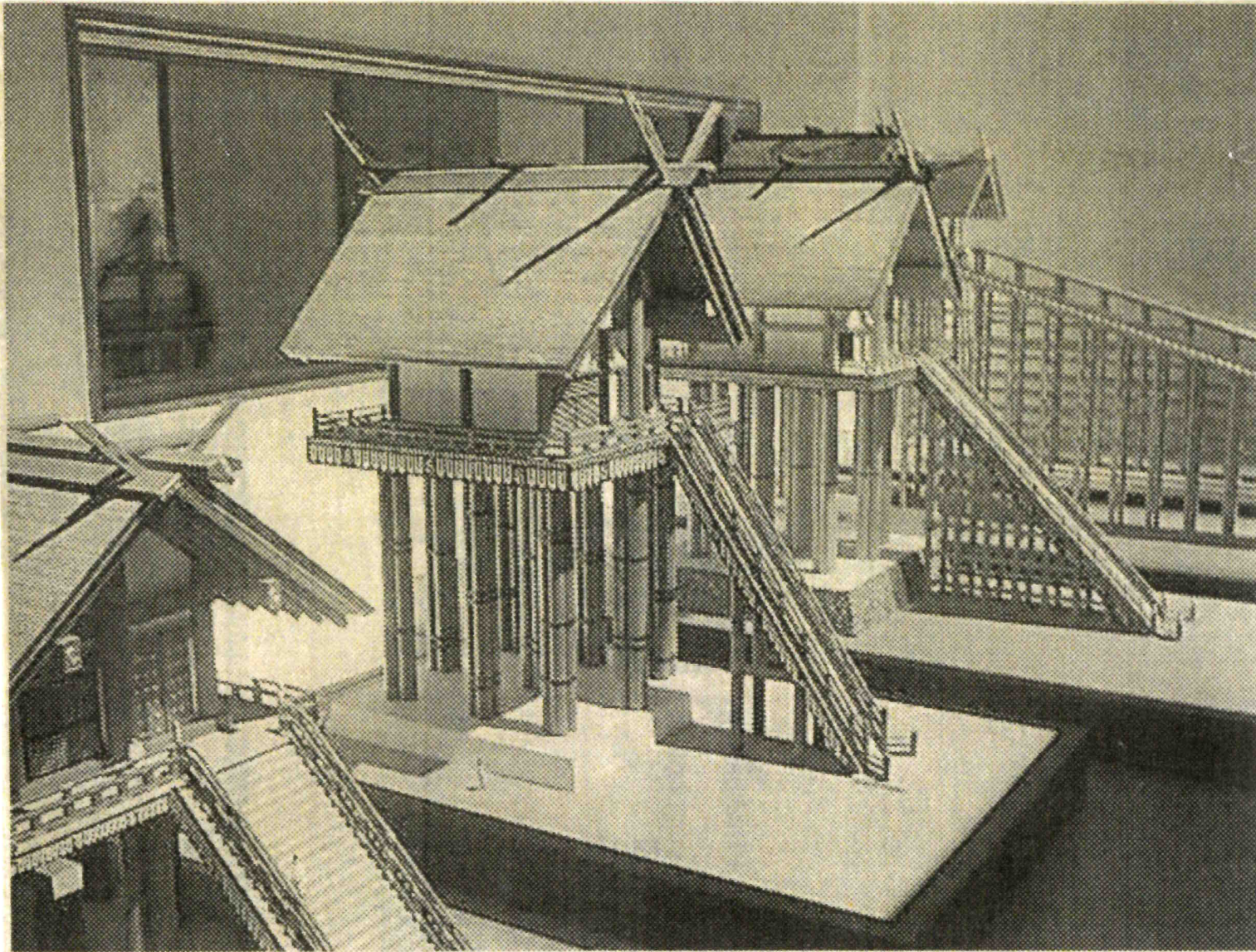
縦線を出来だけ目立たないように下さい。

2,768P- 3/4

背景を均質にしておいて下さい。

・頁の下半分。

・下をはみ出させて
大きく掲載下さい。



朝日新聞
3file
2,768P-
5/5
1/2

13GG 写真図版 470 5人の研究者が復元を競った
島根県立古代出雲歴史博物館
の常設展示（島根県出雲市で）

642P

13GG

『朝日新聞』平成19年4月24日付、^{ふくけん}＜〔出雲大社〕復元建築^{根拠は色々}＞参照、^{急傾斜のものも見られる。}

あるいは
2769-5/6

2769-4/6に1重の垣の下の図がある
2,768-4/4

かめた
掛け渡す 395
2766-3/3

2766-3/3

ようにも思える。

一か、あえて述べると、

金輪造営図(明匠所載)によれば

「ほぼ正方形の玉垣の南正面の門である

楼門の北側すぐのところに、上り廊下(キザハシ)の

登り口があったし

と解されるのに、この点か全く考慮されていな

いといえよう。

三十二丈の高さの出雲大社の御本殿の御扉

口から南へ下ってゆく一町もの長さの引橋

か、楼門・八足門・拝殿・見垣の南正

面の門(銅鳥居)の真上に掛け渡されていた

などとは考えにくい。

それとも、一町もの引橋の登り口の南

に、玉垣の南正面の門(楼門)等々が配置

されていたらでもいうのだらうか。

もしもそうなら、

(1) ほぼ正方形の「広大な面積」を占めていたこ

とになろう。
金輪造営図(明匠)と異なり

(2) それとも玉垣は下南北に細長い長方形

2766-3/3

2766-3/3

くて

2759-2/4の図

提唱 元1515¹
 提示、17至36ありと
 ②768¹-1/3
 ②769¹-1/5
 「出雲大社」15頁階段の存在
 正殿 ②789¹ 2791¹ 建久元年は正殿外
 154¹ 偽殿 ②766¹-1/3 建久元年まで正殿式
 ②778¹-1/2 ②766¹-1/3 2778¹-1/2

だったのであらうか、
 などと疑問が湧く。

さらに注目されるのは、

へ平安時代末期の建久元年(一一九〇)造

替えの古絵図と考証されていり、大社近郷古絵

図(一)はほぼ正方形の垣をめぐらせた正殿式(高

さ七丈以上)の出雲大社御本殿を中心とする近

郷(一帯を描いた鎌倉時代当時の鳥瞰図)に、御本殿の

御扉口から、ゆるやかな勾配で下る階段(一〇

引橋長一町(一)を思わせる棧橋(一)が、↑↑↑描出

されていなり、第352図(出雲大社近郷古絵図)

というものである。(一)出雲大社、4家尊統

学生社、一五四(五頁参照)

平安時代末期頃になって長大な階段が作ら

れなくなったわけではなく、出雲大社創

建以来、平安時代を経て現代に至るまで、決

して、福山敏男博士が提唱されていり、な

る長大な階段は、作られ、るとなかつた

のであらう。

ゆるやかな勾配の

福山敏男博士 全輪の巻目
 ②766¹-1/3

替(造)

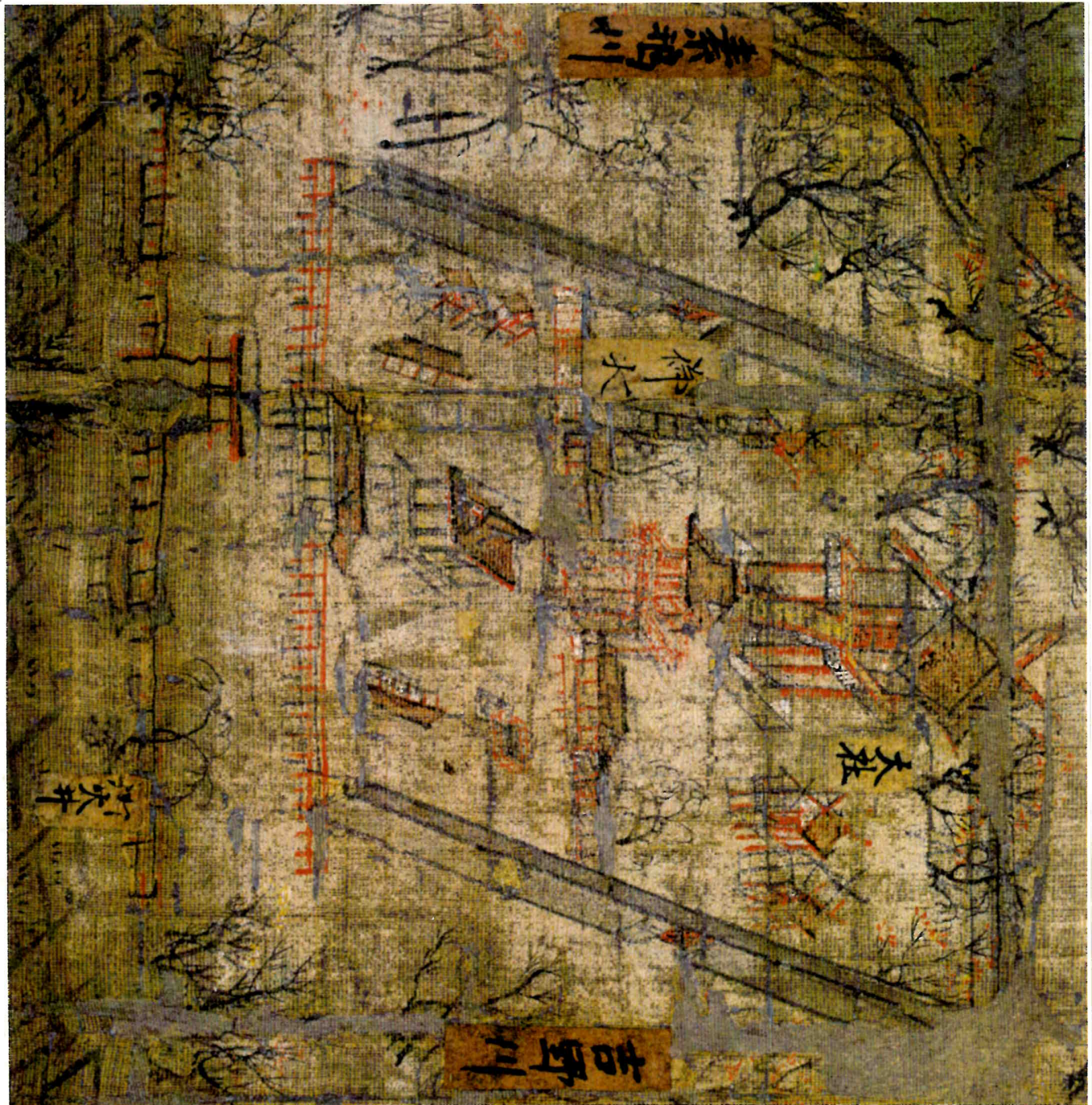
写真の左右端を奥の両端
ギリギリ一杯まで大きく掲載

(17Fまで)。 (端は、見えなげゆゑ)

重要で、
頁全面に掲載す。

ろ

・ 右頁(天竺)掲載下へ: 9/8-69L2



579 千木・屋根・壁面・柱・階段に朱色がある。消えなう上へて下へ

1409

第352 出雲大社近郷古絵図 (出雲大社 神郷図) 鎌倉時代 (13~14世紀) 千家

1304

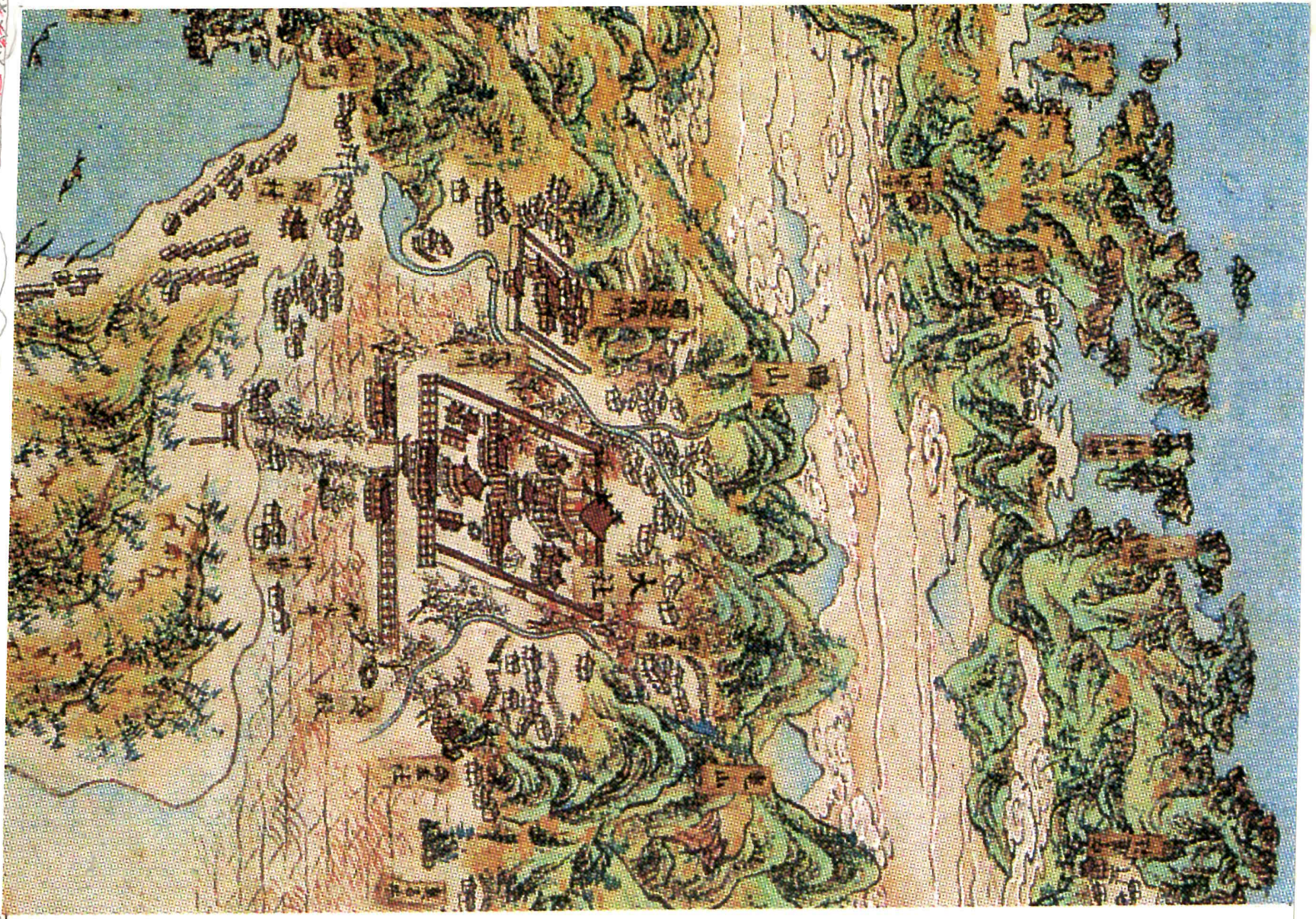
1304

『出雲大社』島根県立古代出雲歴史博物館 平成25年4月発行 74~75、233頁参照。
柱 高欄、神殿壁面、屋根 千木など朱で彩色してある。
四廊は、神殿の9本の柱から持ち出されて、空中に浮かぶようになっている。

この図が「一番ちよいた」
鎌倉時代 1192年 ~ 1333
⑤ 2190~2191
⑥ 2198-2199

・カラー
 ・左頁全配
 ・大隈一坪
 掲載
 下211。
 (重要)
 鎌倉時代

2769P 3/5



HL
 第353図 出雲大社并神郷図〔部分〕模本 (出雲國造 千家翁)
 出雲大社』神社紀行(1) 学習研究社、2002年11月7日発行、16頁。他参照
 原本は、鎌倉時代中期の制作で、重文。出雲大社を中心に、神郷の大観を描いて
 いる。回廊の下が、補強されている。

④ 2,775^P

④ 1,518^P - 4/5

2,769^P - 4/5

カラー
右の
頁の上半分に
掲載下さい。

一の所遺跡

④ 2,775^P
- 1/4 1/79

④ 1,518^P - 4/5

1364 268 第268(図と同一) 第354(図) 江戸時代の出雲大社絵図〔杵築大社近郷絵図〕(17世紀、北島家)
『出雲大社展』島根県立古代出雲歴史博物館、平成25年4月12日発行、81、92、239頁参照。(・仮殿式である)

647^P



④ 2768^P-1/4 11^冊 2,769^P-5/5

ともあれ、福山敏男博士の説は、引橋長一町、口上り廊下キザハシ〇〇と、このみに拘泥して、他を考慮しない、一面的な解釈であるように思われる。

・この物語では、採用しない。

*

では、「引橋長一町」という記載についてどう考えたらよいのだろうか。

■ いうまでもなく、

「出雲大社の神殿の高さが三十二丈（三二

〇尺）、あるいは十六丈（一六〇尺）だったとい

うのに、ほぼ垂直に立ち上がる口引橋の長さ

か、神殿の高さ以上の一町（三六〇尺）であ

った筈はない

といえよう

■ あるいは、

のきえ 軒 1741 ⑤ 2764 1/2 ⑤ 2764 1/2 2,770 1/8
 中古 2764 1/2

欠 2764 1/2
 井 66 架 1149
 架 架 架

され 7 いる 日 階 止 (階段) を、一歩一歩
 登って いったのであろう。

参考 迄に、高さ十六丈の神殿の場合の 日 引
 橋長一町 想像図を掲げてみた。(第 355 図参照)

因 茲に 中国の前漢・後漢時代にはすでに、
 「井戸の上の井架に、一個の滑車(轆轤)

を取り付けて、水汲みを行っていたし
 という。 山東省文物展 大阪府立弥生文

化博物館、七〇頁、八九頁参照)
 も ー か ー たら、

へ 中古 (平安時代を中心とした時期) の十

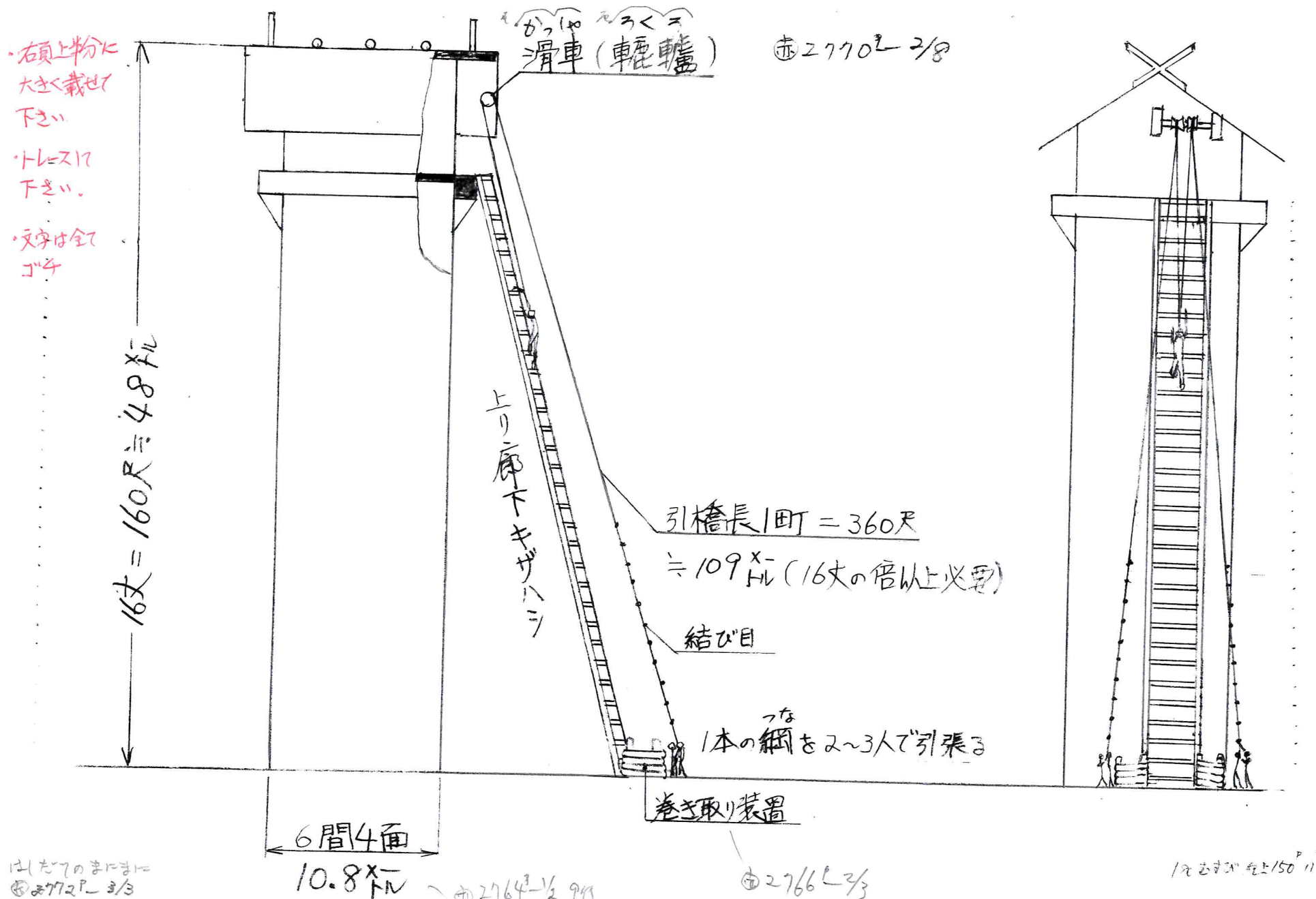
六丈の高さの神殿の軒には、日 滑車 取
 付けられていて、日 引橋 止を上下させるのに

用いられていた。

出雲大社 創建当時の神殿
 へ 出雲大社 創建当時の神殿の 登 降 口 に、そ

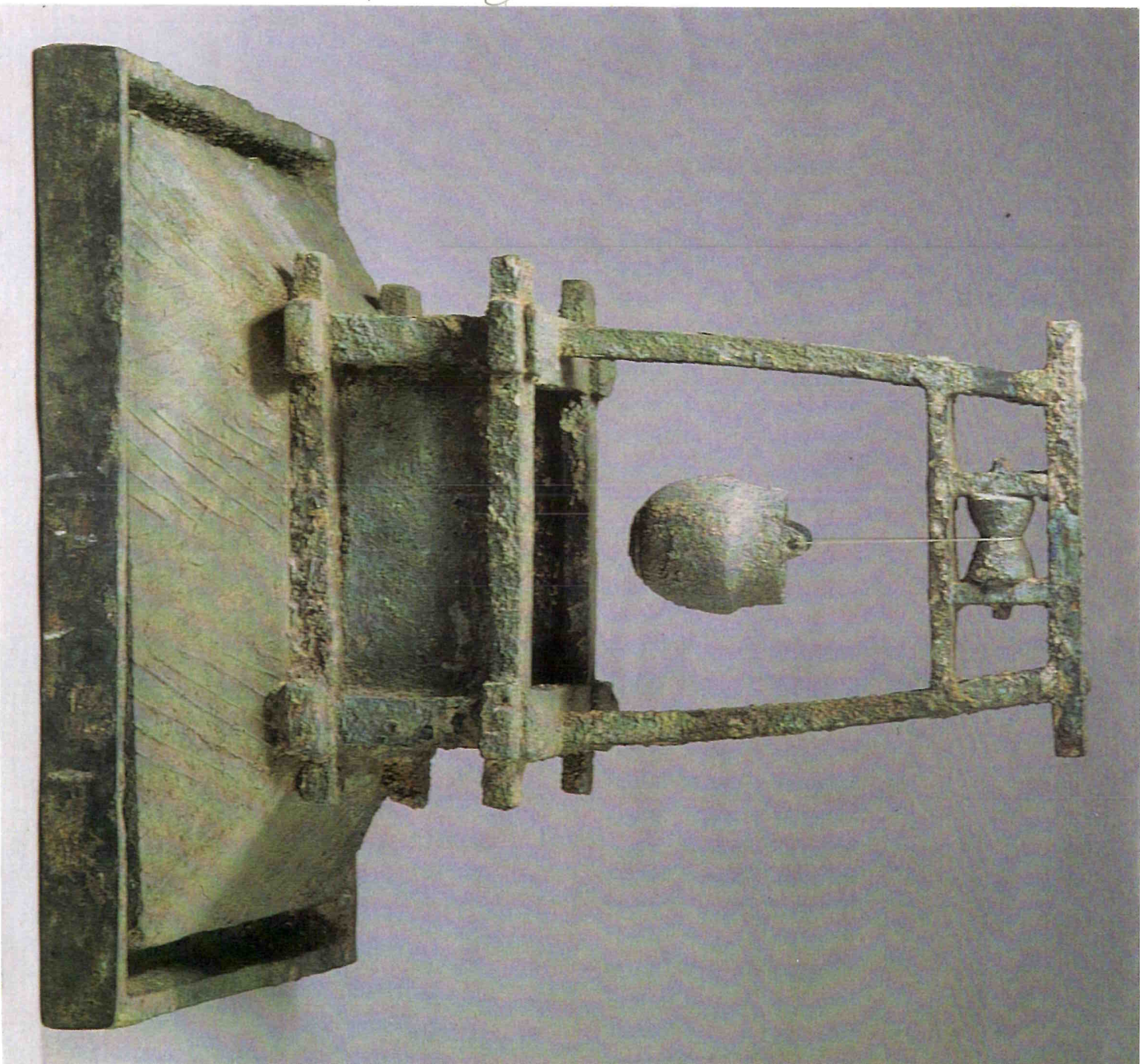
ん にも 便利な昇降具が取り付けられていた
 とは 考えにくい。

ように 思われる。



H25.5.27 1409 第355 図 中古 (平安朝) 頃の『引橋長1町』想像図
650

大かま 662 斗
井 漢代 左肩上半分に揚載下さい。



2,770^P-3/8

651

1409 写真図版 471 前漢(前202~後8年)の墓から出土した井戸の模型。

1309 中国 仙人のいるさと大坂府立弥生文化博物館 1996年10月発行 70頁参照

高さ49.5cm 1969年山東省済寧市出土 山東省博物館蔵

方形の井筒の上 井架が取り付けられ 上は「ハ」式の轆轤が設置される

丸底の銅罐が一つ 吊り下げられている

・この種の轆轤井は、漢代の関中地区(現陝西省)で、かなり広く用いられた。

直径3×10 ② 2765P

② 朝日4.29

2,770P-4/8

平安 1192年

① 朝日4.29

同 ② 2754P-4

出雲大社の巨大柱出土

新刊 96P

出雲大社 出雲大社 出雲大社

島根県大社町

出雲大社の境内

(現在の拝

殿の北約七・五倍の地下約一・五倍のところ

から、平安時代末期(十二世紀ごろ)に本

殿を支えていたとみられる杉の巨大な柱(三本

の基部が見い出された。

丸太三本を金属の輪で一つに束ねた柱を計

九本使った、という当時の右図の記述を裏付

けているといふ。第349図 金輪造営図 参照

直径一・一・三の杉の木を三本合め

せた柱の直径は約三倍であり、平安時代に描

かれたとされる右図「金輪造営図」には「柱

口一丈(約三倍)」と記載されていて、双方の

柱の直径はぴたりと一致する。

柱の基部(高さ約一・五倍)がほぼ完全に

残っており、礎石を置かない掘っ立て柱とし

ては最大級である。

■ 周辺の状況などからみて、九本あったとさ

れる柱のうち、南側中央で棟木を支えていた

6本の側柱

2,770^P-58

③ 朝日4/2.5.6

① 朝日4/2.4.29
宇豆 小柱 行 891号

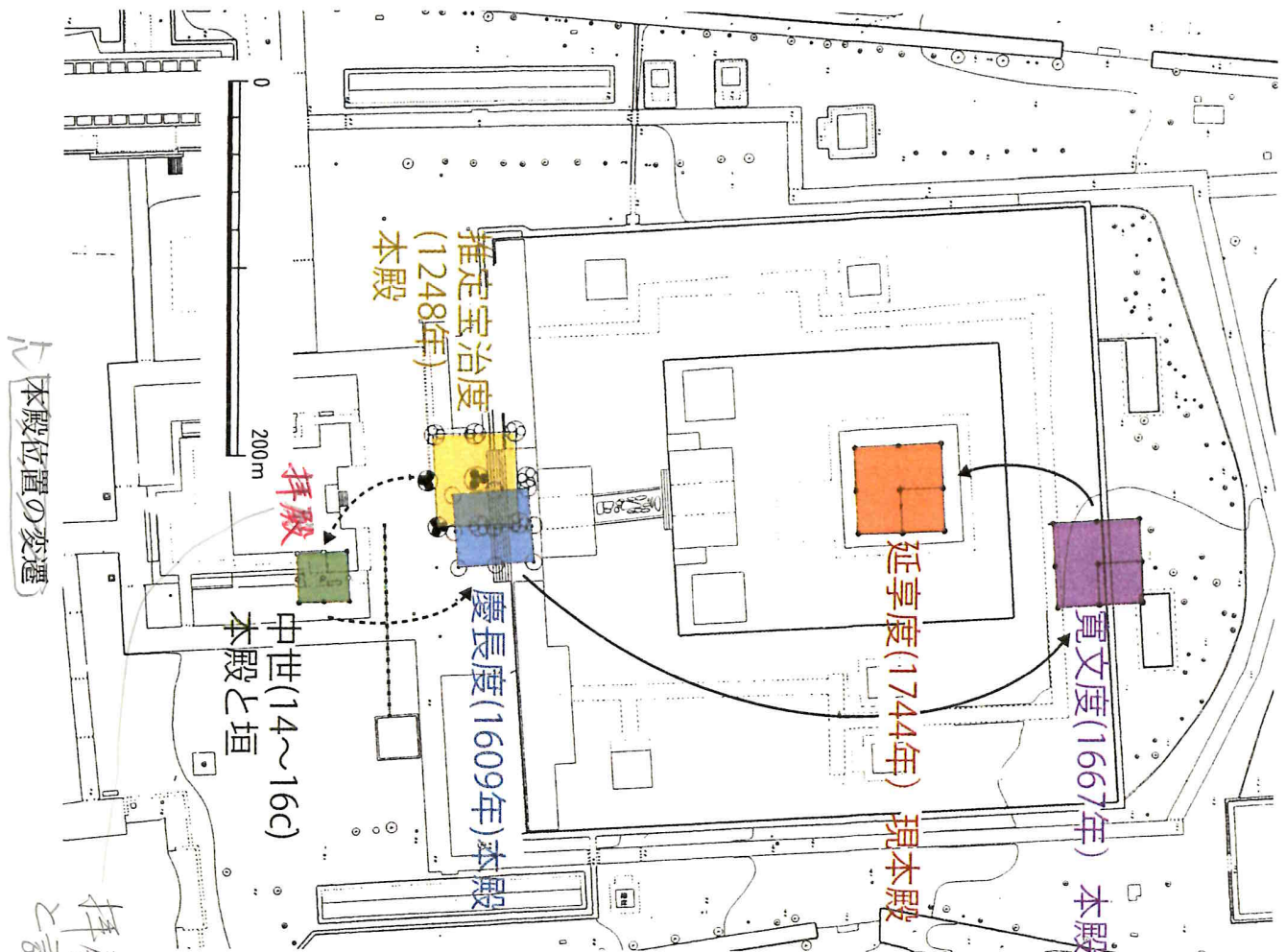
「宇豆柱」らしい。また、その六は東側でも
「柱の跡」に見つかった。(第347・349参照)
柱の根元付近から、木くずが大量に出てき
た。柱を立てた後に、高さや形を手斧で調整
したのではなかうか、とみられている。
そして、柱穴には人頭大ほどの石がつか
ためてあった、という。(「朝日新聞」平成
十二年四月二十九日、五月六日付け参照)
また、「宇豆柱」に引き続き、「心御柱」
および「側柱」六本のうちの一本の基部が出
土した。
本殿の棟木を直接支える宇豆柱の構造同様
三本の杉の丸太が数ヶ所、金輪で巻かれ、一
本に束ねられていたと考えられている。
心御柱の基部は、宇豆柱の七・三は北で出
土した。直径は宇豆柱の約三倍を上回ると見
られる。(第349図・写真版472参照)
側柱の基部は、心御柱から六・八は南東で

2765-3/219

※

大黒柱

・13-1
 右頁に限定一杯大々掲載して下さい。



2770^P-6/8

654

1404

1304 第356 図 出雲大社本殿位置の変遷

『出雲大社展』島根県立古代出雲歴史博物館、平成25年4月発行、18
 106、217頁参照。

(出雲大社
 千宿尊統
 135頁)

拝殿
 と記入して下さい。

2770^P-7/8

- ・カラー
- ・左頁上半分に
大きく掲載下さい。
- ・暗くならないように
して下さい。



2765^P
-7/2
18頁
前々頁11行上、
17頁

写真図版 472 発掘された出雲大社の『^{いのみはら}心御柱』(大黒柱)
『出雲大社』神社紀行(1) 学習研究社、2002年11月7日発行、32頁参照。

H30(2018)7.11(水)~7.11(4回)
H31(2019)2.13(水)~2.13(4回)
令和元(2019)7.20(土)~7.20(3回)

令和2(2020)3.2(月)~3.4(4回)
令和2(2020)4.12(木)~

1/4 1F 1/4
1/3

2020.13.11
2,770⁸
天正改元

2774⁸ 柱はこれ半屋りたを
朝日H21.19付

見つかつた。この創柱跡の石積みは、四月に
出土してゐた。

東西十三間、南北十二間の「田」の字の中
心に心御柱、その左右に側柱を三本づつ並べ

さらに心御柱の南北に宇豆柱を一本づつ配置

したと記載されてゐる平安時代の古図

「金輪造営図」とほぼ一致する。第49回参照

出土した各柱の基部の表面から朱が見つ

かつた。

さらに、柱を束ねてゐたと見られる鉄の破

片も出土したという。(「朝日新聞」平成

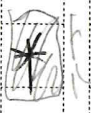
十二年十月八日付)八出雲大社から心御柱

参照)

なお、今後、御本殿の御扉口に連なる引

橋、三重の垣、門跡等々について、次第に明

らかにされてゆくものと思はれる。



紀上 276^p
" 266^p末

合群 紀上 277^p
注 25 2,771^p - 1/2

3379^p - 2/3 あめ 13<5 天の神庫
紀上 276^p
2769^p - 3/3 2780^p 29
2764^p - 3/2 15

すこしばかり 話が脇道にそれるが
それではここに、垂仁(紀)八十七年に記さ
れてゐる曰天の神庫に大和国山辺郡石上
神宮の神宮を収める高い倉庫の語につい
て考察してみよう
■垂仁天皇(第一表により、垂仁天皇に相当
する欽明天皇の^{ミナモト}とであらうと考えたい)の
子として生れた五十瓊敷命は、妹の^{オホナカハヒメ}大中姫に
語つて言った。
「私は^{ヒル}老いたので、神宮を掌ることか出
来なくなつた。いまより後は、かならずおま

あめ 13<5 天の神庫
へ天之神庫も樹梯の隨に

二月五日条

2772^p
- 2/3
88

おれは二枚目から、
領明天皇の子は40才の御と見られる

2772^P-3/3

2,771^P-3/2

紀上276⁰
小162⁰

允恭紀434⁰に
忍坂の大神姫あり。

えが主れ
すると、大神姫は、驚いて答えて言った。
「私は、か弱い女でございます。どうして
女であるこの私が、あんなにも高く聳えてい
る天の神庫（ほくら）へ登ることが出来ま
ようか」
「しかし、五十瓊敷命は、こう言って大神姫
をさとした。
「たしかに、あの神庫はりゅうとして天に
そびえている。だが、私はうまいぐあいに梯
子を造つてみよう。けつて、庫へ登るのに
困ることはない」
もつとも、後年、大神姫は、物部十千根大
連に神宝を授けて治めさせることとなる（後
述）
↑↑↑↑↑次のような経過が読み取れる。
(1) 石上神宮の天の神庫は、高く聳えてお
り、登るのは非常に困難であった。
(2) 五十瓊敷命は、ほぼ垂直に切り立った階段を登
り降りして、神宝を掌っていた。

「まにまに」
元 2089P

まか
降せる
通

小林 1030P
乗 2300P

すい
随人
(随)
え 1169P
へのみ
まのま

かんたん
感嘆

2,772 P-1/3

随=随 小林 1030P (随とは違字である)
紀上 276
「随」 又 277P 中の上

たぐ
託す
え 1364P
中ねる

表「欽明天皇」からみて「おほいどの老翁」とは思ふなり

(3) 年老いた五十瓊敷命は、未だ若い妹の
姫へ任務を託すに当り、うまいぐあ
いに梯子を改造して、か弱い女でも登れるよ
うにした。
と考えられる。
■ また同重仁(紀)八十七年の後文によると、
この後、天の神庫も樹梯の随に
という謗が生れたという。
たぶん、この謗は、
「工夫された新しい樹梯に乗れば、
誰でも、女人さえ、
その身をまかせて、実に乗乗と
天高く聳える神庫へ登れる」
といった、大きな感動を示したものであろうと思わ
れる。
＊ なお、「まにまに」(随に)とは、「その
まにまにまかせるさま」
「物事の成行きに任せ
るさま」
「随意」
「まにまに」の意味であると
いう。(「広辞苑」へまにまに参照)

2,772^p 2/3

② 2771^p 1/2
新へ

大ロツフツツ
随は略字
大ロツ

なとと想像さめる。

たやすく天の神庫へ登れるように、便宜を図

たのではなからうか

・ひいては、^{おほなつみ}大中姫の降の神官達か

利な昇降装置を作った。

・そこで先ず妹の大中姫へ任務を譲り、便

た。

たいう楽をする(こと)には、ためらいがあっ

た。

・随意に昇り降りできる昇降具を造って、

――男の神官である自分自身がこれに乗り

たいう楽をする(こと)には、ためらいがあっ

た。

と記さへているところから推測すると、五十

瓊敷命は

参考までに、あえて述べる、

「かならずおまえが主水」

と記さへているところから推測すると、五十

瓊敷命は

来たのであろう(第357図参照)

・すなわち、樹梯(引橋)に乗りさえすれば、

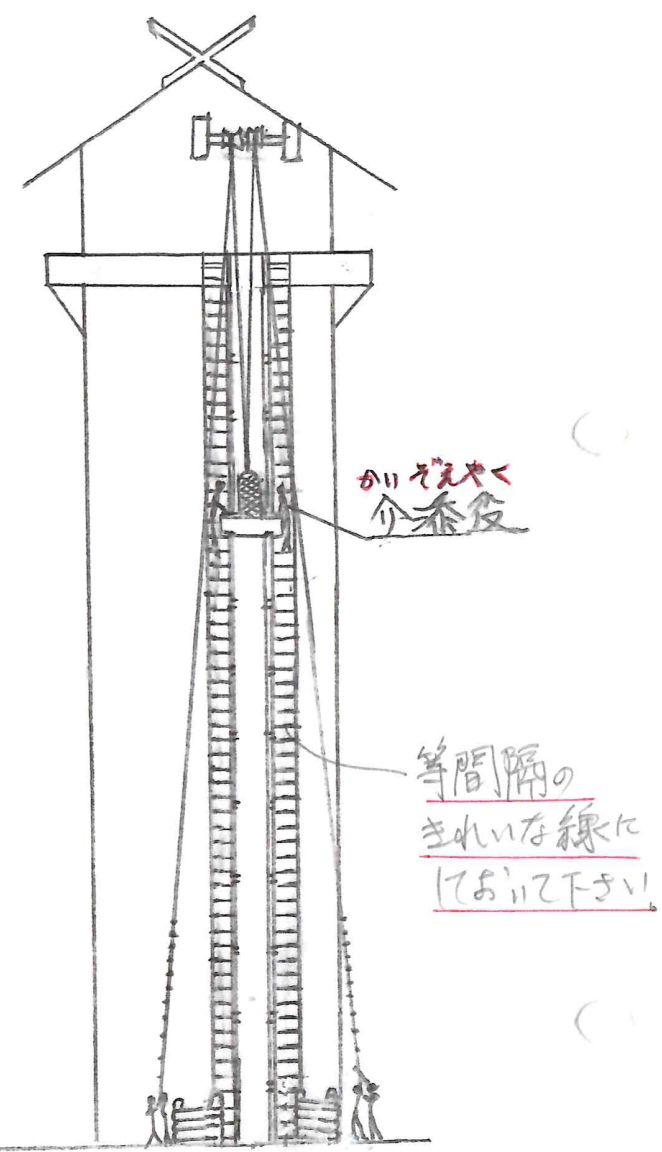
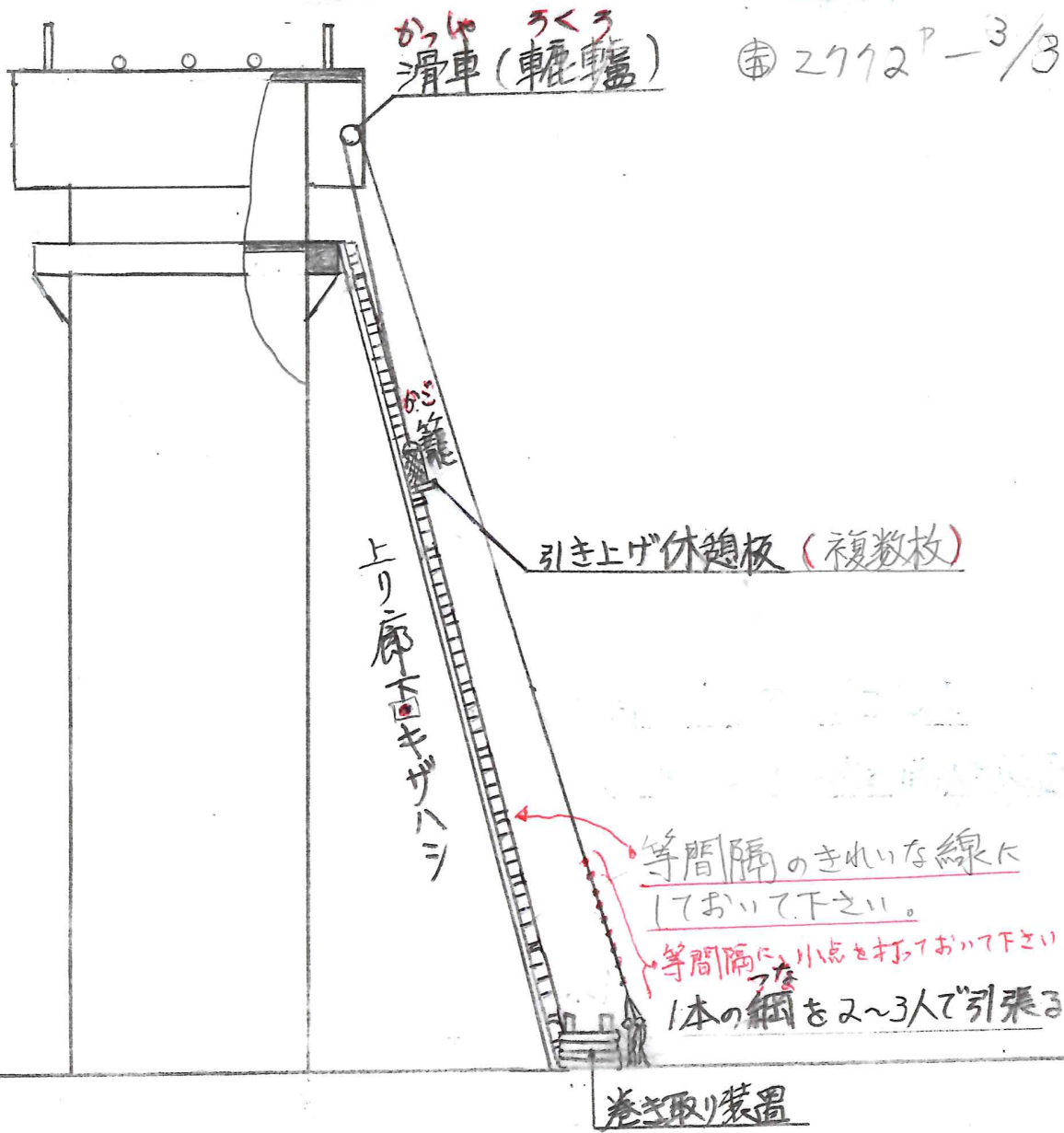
随意(随意)に天の神庫への昇り降りが出で

と解いた。

・橋(橋)に随せて、という意味合いなのだろう。引

・ニニに、樹梯の随に、とは、樹梯(引

・左頁上半分に掲載して下さい。
 限度一杯大きく
 ・トス17
 下さい
 ・全てゴ4



(巨根の図)
 ② 2719^P-6/7
 ③ 2710^P-2/8

1409 第357図

『あめ ほとろ はじめて まにま 天の神庫も樹梯の随に』

想像図

・「より廊下」は平滑な細長い通路、「キザバシ」は階段状だったのであろうか。

橋（引橋）に随せてという意味なのであろう、と
 解いた。

随（つ）まり、樹梯（引橋）に乗りさえすれば、
 随意（随意）に、天の神庫への昇り降りが出
 来たのであろう。

ともあれ、
 石上神宮および出雲大社には、ほぼ同じ
 ような造りの、雲の中へ分け入るばかりの
 殿があつたのだらう。

官が随意に昇り降り出来る樹梯（引橋）を設置
 した、
 ということなめだろう、と推察される。

ともつとも、その後、大中姫命にかわつて、
 物部連等が石上神宮の神宮を治めるようにな
 ったという。

重仁紀八十七年二月五日条に、さらに、
 次のように記されてゐる。

「然して遂に、大中姫命、物部十根大連
 に授けて治めしむ。故、物部連等、今に至る

③ 3379^{2/3} - 2/3

天つき改行
④ 3378^{2/3} - 2/3
紀上276, 紀上270

までに、石上の神宝を治むるは、是其の縁な
り。云々

とある。

以下のような経緯を考えてみたい。

① 母国（旧出雲国）の時代にすでに、石上の

地に、天の神庫が建てられていて、

これが倭人達に受け継がれた。

② 後述するように、垂仁朝に相当す

る欽明朝の御世のことであつたろうか、

物部十千根大連は、北伊勢の神宮が

ら、日（旧）出雲国の大和の石上へ赴き、

石上神宮の天の神庫の神宝を収め

る高倉庫に登って、神宝検校を行

したのである。第六十五章人物部十千根命

の項において詳述したい。同八十七年三月条参照。

③ 以上この時以後、大姫命にかわつて、

物部連等が石上神宮の神宝を治めるようにな

つた、

という次第なのではなからうか。

と推察され

（*）

一方、↑↑↑そのものの倭人社会にはで
へ出雲大社の御本殿や、石上神宮の天の神
庫のような、異常な高さの誇る高樓を建てる
習慣は無かった✓

と
思
わ
れ
る。

因みに述べると、

伊勢神宮・宇佐神宮・住吉大社などの建

物か、――――極めて長大で三十二丈也

十六丈もあつた、なとと記載してゐる文献は

無
い
の
う

ようであろ

＊但し、
家屋の床下は、
かなりの高さだ
ったよ

う
た

（
既
述
）

